英國社會人類學のゼミナールに出席して

中根千枝

昨一九五六年八月末、アムステルダムにて開かれた第三次國際社會學大會に招かれ、アッサムのガロ族の研究を發表、更に奬學金の出たスェーデンに招かれ、研究報告、講演などして約一ヵ月滯在し、英國に到着したのは十月の初であつた。ロンドン大學、スクール・オブ・エコノミックス（Department of Social Anthropology, School of Economics and Politics, University of London）にファース教授（Prof. Raymond Firth, 現在英國社會人類學の第一人者）を訪れると、丁度學期が始まつたところだから、大學院のゼミナールに出席する樣にとのことで、十二月まで、一九五六年度の第一學期を臨時學生としてロンドンに過した。その間ケムブリッジ大學の大學院のゼミナールで、私の研究、「インドにおける母系制について」を發表したり、オックスフォードにも度々訪れ、英國一流、中堅學者と活潑な討論をし、英國社會人類學を學んだ。この小稿は直接私が接して得た英國社會人類學の現狀の紹介とその感想である。（時間のない爲、又日本でもわかることと思うので、今回は全體の學者及びその著作などの紹介は省く）

一　ゼミナール

はじめてファース教授のゼミナール「社會人類學の方法論」に出た時、横にかけた大學院の學生から「貴女は社會人類學をしていらつしやるのですか、或は文化人類學の專門ですか」と聞かれた、私は今迄漠然と人類學というものを考えていたので一寸答えに窮してしまつた。所が二、三週間英國で勉强すると、まさにはつきりした相違がそこにあることを知り、どちらかを專門にすべきであるということを强く感じたのである。英國の人類學者はアメリカや獨墺派の人類學（民族學）を文化人類學と呼んではつきり區別している。アメリカでは最近社會文化人類學という呼稱も出來たそうであるが、とにかく英國で社會人類學というのはあく迄、英國社會人類學という意味で、マリノウスキー、ラドクリフ・ブラウンによつて築き上げられた輝かしい傳統の上に立つている。

獨墺民族學とアメリカ人類學の相違ははつきりしていると思うので、ここでは現在學的立場と思われる英米の人類學の相違をとりあげてみたい。一口に米國の人類學といつても、大學、研究所、學者の數が多く、夫々違つた特色を持つているのでむずかしいが、大體の傾向として隣接科學への强い關心があげられるのではなかろうか。例えば人類學專攻の學生は人類學（文化、形質をとわず）全般のみならず、心理學、言語學、考古學、精神分析學、社會學など廣般な學習が要求される。しかるに英國の社會人類學では專ら社會人類學の方法論に集中されており、形質人類學の單位さえとる必要がない。勿論初學年においては民族誌が背景として必要な科目になつているが、親族組織、政治組織の研究法と夫々の學者の專門のフィールド・ワークに基づいた講義が主なるものになつている。米國から留學している學生達は「エスケープ」と稱している。まさに彼らにとつてはすばらしい逃避であろう。ところが果してエスケープであるかどうかは後に述べることにしよう。

英國社會人類學の研究において最も成果をあげるのは大學院のゼミナールである。このゼミナールに出席する者の

三分の二は既に實態調査の經驗をもつている者であり、又ゼミナールによつては、フィールド・ワークのないものは出席出來ない。よくトレイニングされたB・A、或はM・Aをとつた人類學徒は、夫々のフィールドに一年、二年と過して英國に歸つて來て、このゼミナールで報告する、我こそはと新しい資料に過去の優秀な人類學者達の研究、理論を參考にし、更にそれに修正を加え新しい試みを提出する。ゼミナールのメムバーは普通十人——二十人程で擔任教授の他、既にPh・Dをとつた人達もおり、そのフィールドもまちまちで、アフリカ、ポリネシア、オーストラリヤ、ニュージーランド、カナダ、グリーンランド、ビルマ、インド、セーロン等々。だからここで發表する者は相當たたかれる。自分の研究から出た結論によつて或る公式をひき出そうとすると、いやティコピアの場合はそれでは行かない、とか、マオリにおいてはこの問題はこうした形にあらわれるから、この様に取扱つてみたらどうか、など、全世界のフィールドの生きた情報を得ながら方法論を討論する。又自分の資料と方法論を紹介して、自分はこの方法論でやつてみたがどうしてもこの問題はうまく行かないと云うと、こうやつてみたらどうだろうと色々な專門家から有益な發言がある。その問題は私のフィールドでもあつたが私はこの様に處理したとか、指導や助言を得ることが出來る。

ゼミナールで質問する場合、必ず質問者はその質問に對する自分の考え方を要求される。質問が單なる質問ではゼミナールでは許されない。又自分の立場を強く主張して、ゼミナールのその時の問題からはずれると、必ずファース教授は注意される。ゼミナールでは新しい資料や問題についてどの様に考えて行くかを學ぶのである。理論の形成されて行くまでの陣痛期ともいうべきで、ゼミナールに出ると英國人の考え方というものがよくわかり、本ではえられないものを得、英國社會人類學というものが感覺としてわかつて來る。ここで私は、出版された論文というものは單に氷山の一角にしか過ぎないものであることを痛感したのである。英國人の考え方は非常にプラクティカルであると

共に緻密で冷靜そのものである。本當のディスカッションというものは英國人にして始めて出來ると思つた程である。常に經驗的事實に基づき、理論だけが空まわりするといつたことは絶對にない。他人の理論に反對する場合必ず實證をもつてするから理論が發展する、英語の一つ一つの言葉の使い方にも極度の注意が拂われる、私など correlation という言葉を或る時用いて、ファース教授から relation となおされたりした。必要なことだけを端的に述べる（これも亦英國的だが）様にされ、よく喋るアメリカ人など時々ファース教授からだまつてだまつてなどと注意されたりする。

英國社會人類學の中心であるロンドン大學、スクール・オブ・エコノミックスの大學院のゼミナールは、いろいろなフィールドの專門家がいるばかりでなく、その國際色豐かなことは驚くべきである。英國人の他、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、デンマーク、スェーデン、インド、ビルマ、セーロン、南アメリカ、アフリカなどからの人類學を專攻する者、そして日本からははじめて私が加わつたわけだつた。ファース教授は夫々の地にネイティブの優秀なアンソロポロジストの出現を心から期待しておられるので、外國の學生に非常に力をいれて下さる。南アメリカ、アフリカ、インド、ビルマなど英國でトレイニングを受けた學者が、もう夫々の地で教授として社會人類學をはじめているのだ。日本ではアフリカやインドなどフィールドだと思つている向きもある様だが、既にそうした國にも優秀な社會人類學者が出來つつあることも考慮に入れるべきであろう。ゼミナールのメムバーがこの様に國際的であるということが又、英國社會人類學の研究を一層豐かなものにしているともいえよう。

さて、このゼミナールで研究を發表し、いろいろたたかれ、批評をうけて、フレッシュな方法論のエネルギーをもつて再び夫々のフィールドに向うのである。だからこのゼミナールでは新陳代謝が激しい。その度にファース教授は

ゼミナールに報告なさる、そしてファース教授は「私は決してアンソロポロジストには『グッド・バイ』を云わない」とおつしやり、英國を去るアンソロポロジスト達に「オールヴォアール」とおつしやる。こうしたやり方だから常にフィールドから出たての人が來る、そしてゼミナールは新しいものをすい取り、更に方法論發展の糧にするわけである。出版しないでも、このゼミナール（それはロンドン大學のみならず、オックスフォードでもケムブリッジでもよい）で發表するということが人類學者間では非常に重要なことになつている。出版は大てい早くて二、三年、おそくて五、六年後だから、外國にいると英國社會人類學の進行に五、六年のギャップが出來る。

二　英國社會人類學の中心課題

英國社會人類學を論ずる場合、先ずその父であるマリノウスキーの貢獻をあげなければならない。衆知の如くマリノウスキーは所謂從來のアーム・チェアーの民族學に對してフィールド・ワークにもとづいた研究を提唱して新しい社會人類學の分野を開いた。現在では、マリノウスキーは經濟學におけるマルクスの存在に似て、その根本的な研究態度は高く評價され、常に社會人類學者の指標となつているが、多くの修正を加えられている。日本の民族學者（日本のみならず、英國以外の人類學者間においても）などおうおう英國的社會人類學をマリノウスキーの所謂ファンクショナリズム（機能主義）とし、歴史主義民族學などに對立する方法論の如く考えられていたむきがあるが、決して英國の社會人類學はそうした意味でのファンクショナリズムではない。

マリノウスキーと並んでその貢獻を高く評價されるのは云うまでもなく先年亡くなつたラドクリフ・ブラウンであ

る。ラドクリフ・ブラウンは社會人類學の中心課題を社會構造（Social Structure）の研究にあるとし、英國社會人類學のあり方を明らかにした。ファース教授は彼をソロンに例え、社會人類學における憲法の創始者であるとした。[1] 從つて英國社會人類學を特色づけるものはこの二人によつて礎をおかれた如く、フィールド・ワークと社會構造の分析にある。

一九三〇年前後のマリノウスキーのトロブリアンドの研究[2]及びラドクリフ・ブラウンのアフリカ[3]及びオーストラリアの研究[4]から一九四九年の Social Structure[5] 及び一九五〇年の African Systems of Kinship and Marriage[6] に到る道程はよくその英國社會人類學の發展のプロセスを跡づけている。植民地統治の御用學問から出發した社會人類學は、三十年後には堂々たる獨立の學問として學界にゆるぎなき地位を占めるに到つたのである。フィールド・ワークの累積は、たえざる社會人類學者の研究と共に獨立の理論大系の發展に貢獻し、今や社會人類學者といえば、フィールドにおいて珍しい資料を集める職人ではなく、立派な理論家である。實際、私ははじめて英國でゼミナールに出たり、一流の人類學者の論文をよんだ時、丁度デュルケームやマックス・ウェーバーを論じたり、讀む樣な感じがしたのである。

現在、ラドクリフ・ブラウンなきあと、ファース教授を中心として活潑な學界の動きを見せている。ファース教授はティコピアの研究を中心としてオーソドックスな立場で、更に過去の理論を完全なものへとみがく樣努力しておられる。現在の英國社會人類學者は殆どファース教授を師と仰いでいる。英國社會人類學の現狀を傳えるものとしてファース教授の Social Organization and Social Change[7] を讀まれたい。

さて問題のフィールド・ワークと社會構造であるが、フィールド・ワークというものが社會人類學において必須の

條件になつていることは前記「ゼミナール」の内容によつてもわかることだが、フィールドにおける態度については Notes and Queries[8] にくわしく述べられているから、ここでは專ら社會構造について社會人類學者がどの樣にとりくんでいるかを考察し、英國社會人類學の立場を明らかにしてみよう。

社會構造（Social Structure）という言葉は經濟學などに使われている意味と違つて「共同體の性格の實體」という樣に用いられている。一定の共同體における人間關係をあらゆる面から分析し、そこに出て來る關係をアブストラクトして一つの實體として提起する。從つて親族關係、統治者と被統治者の關係、社會層の問題、僧侶と大衆の關係など、夫々の研究がそれのみですまないで全體に統合される關係を見るのが究極の目的である。社會人類學の理論が相當出來上つた今日では、對象は未開、文明社會を問わない。この樣に述べると社會學との區別ということが當然考えられるが、そこには歴然とした方法論の相違がある。社會學では調査の對象として人間をグループの中の一分子の如く扱い、あらゆる社會に通用する方法論を異なる社會に適用するが、社會人類學では、對象としての人間はあく迄個人として、夫々の社會的位置づけが重要となり、異なる社會の分析から人間關係のあり方を明らかにする方法論を生み出して行く。從つて對象は同じでも別の見方をし、違つたアングルで人間社會の實體を明らかにするのである。例えば社會層の問題においても外にあらわれる上、下關係だけでなく、その背後にある親族關係とか、親分、子分の關係、それにまつわる經濟關係など、どの樣にからみ合つているかを個人の行動を通じて考察し、表面に現われないかくれた力がどの樣に動いているかを引き出し、社會構造の性格をうち出すのである。從つてアメリカなどの現在學的人類學が社會學との區別がなくなる樣な傾向があるとかの見方がある樣だが、英國社會人類學と社會學の相違は非常にはつきりしている。勿論相互に負う面があるが、その方法論はかくの如く獨立した立場にある。

社會構造の分析のためには特に親族關係などが缺くべからざる對象となる。あらゆる文化現象はその理解の媒介として扱われる。例えば或る村で死者が出た。そのお葬式において僧侶の役を持つ人間がどの様なお經をとなえて、人々は何をお供えして、式はどの様にしてはじまるかということよりも、その村の誰が司會し、彼は死者とどの様な關係にあるものか、彼の共同體における位置づけはいかなるものか、又參列するのは死者とどの様な關係（特に親族關係）にあるものだろうか、など、死者との親族關係が中心となり、お葬式という現象を通じて、その社會組織の性格を知ろうとする。ここに社會人類學が文化人類學と區別される。フィールド・ワーカーは見たままの現象をノートに羅列するのではなく、そこに撰擇があり、解釋を與え、抽象することによつて全體への統合を試みる。この意味でエヴァンス・プリチャードのヌェール[9]の研究は見事な傑作である。彼はヌェールの宗教を論じても、又親族關係の問題をとり扱つても、常に全體への統合、政治組織への相關關係を念頭においている。エヴァンス・プリチャードは一つ一つの文化現象をいかに抽象化し、全體の機構をどの様にダイナミックに統合し、提出するかをヌェールの研究によつて示し、彼の高いアカデミック・スタンダードと共に現在英國社會人類學の手本を示した。

英國社會人類學は英國的思考をよく表している。センティメントとか價値を調査者が附加することを極度に排斥する。自分と違つた社會を分析する場合に我々の尺度で他の社會の文化價値を云々するよりも、そこに動くファンクションをアブストラクトすることが最もそのリアリティを知ることであると。現在英國において高くその理論を評價されている代表的社會人類學者リーチはカチン族の研究[10]によつて彼の立場を明らかにしたが、彼は云う、自動車の繪をかいて、その説明に自動車と書くべきで、これに對してフォードか、キャデラックかと聞くのはまさにナンセンスであると。從つて社會人類學では母系制社會の調査をしても、母の意味などということは問題外であつて、その社會

の親族關係によこたわるファンクションを見出すことが重要であるから、母系制も父系制も同じレベルで取扱う。母系制と父系制は丁度、フォードとキャデラックの違いに相當する。ここに獨墺民族學から英國社會人類學がはつきり區別される。母系制か父系制かとの區別よりも、結婚後夫の家に住むか、妻の家に住むかということが非常に重要な問題になる。これは全體の政治機構に關聯してくるからである。英國社會人類學者の最も關心のある點であるこの問題は、米國人類學者には殆ど問題とならない。例えばナバホ・インディアンについての研究が二百七十も出ているのに、その中どれ一つとしてナバホ・インディアンがマトリローカルであるかパトリローカルであるかということが記してないという。ここに再び英國社會人類學が米國文化人類學からはつきり區別される。

英國社會人類學が社會構造の研究から必ずその政治機構との相關關係を論じているのは全く英國という背景をよく表している、政治機構の發達に世界に比類なく、植民地統治に成功した英國において、はじめてこうした方向がうなずけられるのである。

あらゆる文化の斷片を見ても、そこに内在する問題を追求して行くという態度が英國人類學の特色であろう。一つのマテリアルをどう人類學者が解釋して内在する問題に迫るかということがフィールド・ワーカーの價値を決定する、從つて獨自な問題意識を持たないものはフィールド・ワーカーとして落第である。

しかし、こうした獨得の研究方法を持つ英國人類學者は決して獨墺派や米國的文化人類學の行き方を否定していない。歴史主義民族學もアメリカ文化人類學も立派な價値があるのである。ただその方法が違うだけである。現にロンドン大學 School of Oriental and African Studies には文化人類學の部門があり、岡正雄教授と同僚のウィーン派のフェーラー・ハイメンドルフ教授が主任をしている。日本でも違つた人類學（民族學）の行き方に對していろいろ

論議され、考えられ、特に石田英一郎教授はその著「文化人類學ノート」で文化史的民族學成立の基本問題の章で論じられているが、私は現在、英國社會人類學に接してから次の様に考え、比較出來るのではないかと思う。丁度繪畫における、自然派、印象派、抽象派の違いの様に。例えばコローの繪、セザンヌの繪、ピカソの繪、夫々傑作であり繪畫としての價値がある。只、そのテクニックの相違である。どれが好きかということは出來ても、その優劣を云々したり、どれであるべきかを論じ合うのは、當つていないのではなかろうか。その上人類學の場合には條件がもつとナショナリティの強いものであるから、夫々の派に特殊なニュアンスがあるのは當然であろう。石田教授もアメリカ文化人類學の現在の傾向に對してアメリカという背景から論じられている様に、英國社會人類學も亦同じであることはさきに述べたばかりである。しかしこうした大きな三つの流れを如何にして接取し育てて行くかということは私達日本の民族學徒にとつて大きな問題であろう。

さて英國社會人類學にもどるが、英國社會人類學はまさに現代繪畫の如きものではなかろうか、事實をそのまま寫すのではなくて、物體に解釋を與え、よりリアリティの表現を試みるのである。アブストラクトを行う英國人類學者はその背後にモルガン、タイラーにはじまる尨大なクラシックの勉強をしている。丁度現代畫家がその背後にしつかりしたデッサンの勉強の時代を持つていると同様に。解釋というものは全人間的な教養にかかつているので、その教養の廣さも私を驚かせたものである。さきにも述べた様に、大學の學位をとるためにはアメリカ人が「エスケープ」だと呼ぶ程限られた單位である。英國社會人類學者は大學で單位をとらない代りに、常にたえざる勉強をおこたらない。だから歴史を論じても、哲學、宗教、文學においても、驚く程の教養を示す。科學的な冷徹な思考がこうしたあらゆる教養を糧にして、フィールド・ワークから社會人類學の理論をつくりあげて行くのである。從つて或る意味で

天才教育かも知れない。社會人類學の試驗に滿點をとるだけではダメなのである。他の學科でもそうだろうが、社會人類學では獨創性のないものは落伍する。私の滯在中にもよくこんなことを耳にした。「あの人は大學の成績はすばらしくよかつたのに、どうしてもアンソロポロジストになれないのだ」。多くの學生の中には、大學時代に數多くのアンソロポロジストの學說を敎えられるので、そうした傳統的遺產にまけてしまつて、それ以上自分で獨自なものを發展出來ないのである。多くの方法論を公式的に覺えていて、いざフィールドに行つても、その生の材料を獨自に處理するだけの頭がないのである、こういつた意味で案外若い人類學專攻學徒の中には埋れてしまう者が少くない。こうした現象に對して、一部ではアメリカ式にフィールドに行つてもむだにならない方法をとるべきであるとの聲もある。量というものが問題にされるアメリカのアンソロポロジーでは職人的なアンソロポロジストの立場も大いにあるわけだが、獨創性の要求される（方法論の發展のための）イギリスでは學者以外のアンソロポロジストは落伍しなければならない。特に今回、植民地がなくなり、又前に記した樣に彼らのフィールドにネイティブの人類學者が出て來て、安易なアンソロポロジストの行き場がなくなりつつある。

水準の高い社會人類學はグルンドが廣く、又常に他からすいとろうとする努力が見え、それが又英國社會人類學者の强みであり、度量の廣さである。丁度私の滯在した期間にもそのことをつくづく感じたのであるが、私はすなおに、日本で本當の意味で人類學を勉强するチャンスがなかつたから、とても大學院の人類學のゼミナールに出る資格はないといつたが、東洋史の專攻であるということ、そして三年間のインドのフィールド・ワークを持つているということで迎えられ、又デンマークの法律の專門家はグリーンランドでのエスキモーのフィールド・ワークが買われてゼミナールを樂しんだのである、トレイニングはあちろの專門であるから、オリヂナリティと新しい資料を持つたものが

英國では歡迎される。

三　英國人の考え方と社會人類學

英國において社會人類學がすばらしい發展をみせたのは、とりもなおさず、この英國人的な考え方におうといつても過言ではなかろう。經驗哲學、議會政治を發達させ、植民地統治にあの成功をおさめた、冷靜でプラクティカルな考え方が近來三十年間にこの樣に社會人類學の發達をなさしめたのであろう。

アメリカやカナダからも澤山社會人類學を學びに英國に來ている。アメリカではあんなに人類學がさかんなのに何故英國に來るのか、と聞くと皆、「セオリー（理論）がないからだ」という。アメリカだつていろいろな理論がある。しかし彼らがセオリーと呼ぶのは、考えることであつて、既に出來た理論ではない。英國では多くの內外の優秀な人類學者の理論は衆知のこととしてその上にどの樣に新しい解釋を試み理論をよりよいものにして行くかを學ぶのである。どの理論一つだつて完全なものはないのだ。その上全世界には人類學の對象としての處女地は無限である（勿論文明社會もはいる）新しい資料に對して、あらゆる過去の理論を檢討し、更にそこに修正を加え、發展させて行くということが社會人類學の研究である。

特に最近十年間に出た社會人類學の研究の中にはすばらしいものが澤山ある。しかし英國の學者はどれにも、もろ手をあげて贊成していない。何一つ流行になつていないのだ。それがどんなにエポックメーキングなものであろうとも、誰か優秀なアンソロポロジストが新しい理論を出すと、英國の學者は先ず「これでいいものかな」と考える。す

ばらしいと云つて飛びついて、そのやり方でやつたら、も早、學者ではないからだ。どこかの學者の樣に外國の學者のやつたことをまねして學者で通るという安易な生活は英國の學者には許されないのだ。又傳統が强いから、彼らの傳統的な中心課題からはずれるものは殆どとり入れられない。だから戰後日本ではずい分問題になつた樣なロールシャッハ・テストとか、パーソナリティなどの問題はお茶飲み話にしかならない。その代り外國の研究でもマードック、レッドフィールド、レヴィー・スュトラウスなどの研究は大いに問題になり批評されている。

英國社會人類學者は常にこうした云い方、批評をする。夫々の問題の點を指摘した上、相當やつつけておいて最後に、しかし全體としては仲々いいものだ、とか、大變よい論文だ、しかし私は貴方の方法論には全面的に贊成出來ないけれども。などと。一つの論文をいろいろな學者に見てもらうと批評は夫々違つたものを持つており非常に參考になる。

又討論においても、例えば私が黄の理論を出せば、青の理論をもつている彼は綠の立場に立ち、理解のためにより深い、共通の立場に立つ。それだけグルンドが廣く、考え方に彈力性がある。だからイギリスの學者との討論は非常に面白く、あきることを知らない。頭腦の彈力性とじみな考え方は本當に教えられるものが多い。

流行をつくらない英國社會人類學の學者達にはドグマがない。どんな優秀な學者でも自分の研究、方法論を決して絶對的なものだとは思わない。相當に自信を持ちながらも、常に發展、修正しようとしている。こうした大學者の態度はとりもなおさず若い優秀な人類學者の出るチャンスを與える。イギリスに行つてみるとはじめてわかるのだが、まだ外國に名の知られていない樣な若い學者の中に多くのすぐれた社會人類學者がいる。そして又老大家もこうした若い研究者に負うところも多い。この學界の空氣がまさに今日のすばらしい英國社會人類學をつくり上げているのだ。

非常にすぐれた學者がいるのに、その下に彼をつぐ樣な弟子のいない大陸の學界と對照的である。

一人、一人がドグマティックにならないで、他人の研究をよく理解し、批判するので學者間の對立に弟子が不自由するといつた現象は殆ど見られない。私の樣に突然留學した者などにとつてこの空氣はすばらしい。いろいろ討論したりしている中に、老大家でも、この問題はケンブリッジの誰々に相談するのがいいだろうとか、これは文化人類學の教授に相談してみたまえと云つて、すぐ紹介狀を書いてくれる。アポイントメントをとると、夫々の學者は非常に期待して待つていてくれるし、何も知らないカケダシが、なんていう態度をとらないでどこまでも誠意を持つて討論、指導してくれる。短い二ヵ月半の英國滯在の中でも私はオックスフォード、ケンブリッジ、ロンドン大學などの一流學者達に本當に有益な討論、指導を得ることが出來て、一生の中忘れることの出來ない學問の理想境を樂しんだのである。

最後に一言しておきたいことは、彼らの「東洋、特に歷史のある民族への關心」についてである。

アフリカ、オーストラリア、ポリネシアを主なるフィールドとして發達した英國社會人類學は、最近ほぼその完成期にある。アフリカ、オーストラリアの未開民族が一應調査しつくされ、その尨大な資料に基いて社會構成の方法論のお城がほぼ出來上つた樣だ。現在の英國人類學者はこのとぎすまされた方法論をもつて、東洋社會の分析に非常に興味を持つている。例えば今回私の出た Seminar on Problems of Social Structure in Non-Industrial Civilization というゼミナールでは、イラン、エジプト、ビルマ、インド、支那、日本などの社會が對象となつていた。このゼミナールなどで特に私が感じたことは、アフリカ、ポリネシア、オーストラリアであれ程強い英國の學者は東洋の問題では非常に弱い。特に私が日本、支那という土地に育ち、東洋史を學び、インドのフィールド・ワークをして

いるので、日本、支那、インドについては、全くがつかりであつた。第一彼らは夫々の歴史的條件に暗く、完全に違う文化的背景に理解が足らず、生の資料に遠い。單に英國の學者だけではないが歐米のアンソロポロジストに強く感じたことは、インド、日本、支那という様な社會とアメリカインディアンやアフリカの部族の社會の大きな相違がよくわかつていないことである。彼らはノン・ヨーロピアン・カルチュアという様に一まとめにしている傾向が強い。ヒマラヤでチベット民族の研究をしていたアメリカのアンソロポロジストは、チベット民族をアメリカインディアンと同じ様にとり扱つていた。これでは決していい研究が出來ないのであつて、歴史のある東洋社會の研究にはもつと違つた方法論がとられるべきだ。私はここに、日本をはじめ東洋の學者が大いに活躍しなければならないと信ずる。日本の東洋學の高い水準を思う時、私は日本民族學の將來に強く希望を持つ者である。一日も早く充分歐米の人類學を接取して、歐米の學者の出來ない様なよい研究を、我々のおかれたよい條件を生かして、出して行きたいものである。私は決して日本の學者がアフリカやインディアンの研究をすることに反對するものではないが、唯我々は或る意味で人類學においても有利な立場にあるということを強調したいのである。

（ローマにて　一月十五日）

（1）Firth Raymond.; 1954 Sociall Organization and Social Change, *J. Roy. Anthrop. Inst.* vol 84, Part 1.

（2）Malinowski, Bronislaw; 1927. *Sex and Repression in Savage Society*, London; 1932. *The Sexual Life of Savages in North Western Melanesia*, London.

（3）Radcliffe-Brown, A. R.; 1924. The Mother's Brother in South Africa, *S. Afr, F. Sci* 21.

（4）Radcliffe-Brown, A. R.; 1930. The Social Organization of Australian Tribes. *Oceania Monogr.*, No. 1, Melbourne.

(5) *Social Structure* 1949., Presented to A. R. Radcliffe-Brown, Meyer Fortes ed., London.

(6) *African Systems of Kinship and Marriage,* 1950, A. R. Radcliffe-Brown & Daryll Forde eds, London.

(7) Firth, Raymond; 1954, ibid.

(8) *Notes and Queries in Anthropology,* 6th, Edn., London, 1951.

(9) Evans-Pritchard, E.E. *The Nuer,* A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People, Oxford.; 1951, *Kinship and Marriage among the Nuer.* Oxford; 1956, *Nuer Religion,* Oxford.

(10) Leach, E.R.; 1953, *Political Systems of Highland Burma,* London.